

美登毛鷹嘉数

凡例

①下

- 一 この日記を何とかなつてくべきと、くさくさ考へたれど、
とみによろしき名をもおもひ出ねば、先はじめに出せる
高崎正風ぬしの歌によりて「みともの数」と名つけぬ。
行在所、御小休所、大かたはしるしたれど、いふべきこと
おほくて、中にはしるしつけぬもあり。また時刻のこと
さまざまにして一様ならぬも多し。こはふひとの
公記あれば、それに譲りて大むねをあげぬ。
一 名所旧跡の考へ、又詞のうちにあだし書をひきたるに、
ことごとくあげんは煩しければ、わづかに其詞をつみて
しるせるも多し、またよく人のしりたらんことは、いよいよ
いふべきたるもあり。されど其書のころたしか
ならねばわかたき所はみな頭書にして
みやすからしむ。
- 一 学校生徒の迎へ奉れる、ところごとく同じさまなれば
はぶきてしるさぬもあり。されど、ことに賑はしくし
めとまる所々はかきしるしぬ。所によりては一校のみ
にもあらず、あまたの学校より旗おしたて、其校の

②上

- 一 名どもしるしたるもおほかりしかども、ひとつく
かきしるすいとまなくて、はぶきたるもおほく
忘れたるも少なからず。
- 一 歌は、人々のことごとく其名を出せり。名をしる
さぬは、みなおのがえせうたなり。
- 一 からうた多くつくりたれど、おのがのはひとつも
あげず、人の巻の中にあげたるもあり、末に附録に
して出せるもあり、又絵の上にするしたるもあり。
- 一 絵は其所々の真景をつつしたれど、車にうちのりて
すみやかに馳過たれば、其あらましをふところ紙に
かきたるもの多く、ふたたびこれにのするをり、かきひが
めたるもおほかるべし。藤波侍従、加部殿夫を除く
外はしたかきを友だちにわかちて、あつらへたるも
ありて、猶とおほゆるもあれど、其まゝ出しつ。名をしる
さぬはおのがかけるなり。

明治十三年九月

池原香釋しるす

②下

みともの数 巻一

池原香穉 述

うちしきりたるさみだれの、晴ままちえて、今年

明治十三年の夏、山梨の県より、長野・岐阜・愛智・

三重・滋賀のあがたどもを経て、京都へめぐりたま

はんのあらましありて、六月十六日といふ日を、鹿嶋

またちの日と定めましつれば、みともの人々おの

がじし装束そうそきて、けふをはれと出たつ。その

みそなへのついでには、警視官みさきつかへまつり、

次に騎兵二小队、次に御旗、次に近衛土官、次に

鳳輦、次に東伏見二品親王、次に騎兵、次に侍従長、侍

従、侍医、次に宮内卿輔、皇太后宮大夫、皇后宮

太夫、式部頭、宮内書記官、式部助、掌典等、其次に

伏見二品親王、三条太政大臣、山田参議、三浦陸軍

中将、其他各官省供奉の書記官等、いづれも馬車

③上

にてつかへまつり、ひきつゞきて奉送の皇族、大臣

参議、在京勅任官、麿香間祇候等、いと夥し。おの

れもその末つかたのつらなれば、暁ふかく起出て

ともし火のもとに朝げたうべて、四時ばかりに

大宮のうちにまうのぼる。御門いまだあかねば

しばし待てたくずむほど、高崎正風きたれり。
うちつれて同じつめ所にいりぬ。このぬし歌
ひとつうたひておくらる。

おもふ友 みともの数にいりぬるは わがゆく

よりも 嬉しかりけり このころは、こたひの御

ともには、わが文学掛のものはひとりもめされず

と、はじめいひあへるのみならず、わがとも

げにさることこそとて、たれもくしかころ

えて、さらにその心がまへする人なかりしに、五月の

なかばにや有けむ、ゆくりなくおのれをめされて

御とも共の員かずにくはへ給ひ、こたひの道の記、書

③下

記するべきよし、おほせことあり。同じ文学の

かゝりなる加部巖夫もともなふべきよしなれば、

今さらのやうに驚かれて、かつはいとかしく

かつはいとうれしく、何くれと旅の調度などとり

とへのへなどするを、正風ぬしは、たびく御とも

つかへまつられて、いとよくなれにたれば、かれは

しかく、くれはかうくなんあるべき、などをし

さとさるゝに、たよりをえて、何事もとひたし

などするを、ねんころにあひかたらひて、とみに

旅のよそひなりぬれば、そのころをしかよま

れたるなりけり

④上

(明治十三年) 六月十八日

(上野原発)

(中略)

九時三十分鳥沢の駅につく

行在所は井上清武が家なり。おのれらがひるの

いこひ所は白須太左衛門といへり。まだ早けれど

ひるげたうべてたちいでぬ。うへは御板こしにめさせ

たまへり。けふのみちおほかたけはしき山坂おほけ

ればなり。午前十一時のころ、猿橋駅につかせ給へり。

この駅より廿八町余のこして、猿はしいたる。長

十七間、幅二間の板橋なり。桂川の川岸あひむか

ひて削りたてたる如き巖の上にわたせり。橋の

上より水際まで十二三間、水際より水底まで、また

十二三間ありといへり。まことに其測の水、青みわた

りて藍のいよへ。橋のうへより見おろせば、めぐるめきて

危ぶげなることいふばかりなし。さて橋のつめに立ち

つへくみわたせば、向ひのきしのなからばかりより生

出たる木とも、あまそよら立ちて、うへうへうへ

④下

しげりたる中より、一筋の滝つ瀬、ひんきもさやて

てんきもおつるが、これも五六丈もやあらん。いはほを

つたひてほとばしるに、其もとにすなとりする舟

ひとつ横たはれる。筆にも詞にもおよぶべきにあら

ねど

なる橋の 岸より落る 滝つせに 夏猶寒き こころ

のみして うちわたりにて岸よりすこしおりて、橋の

うらを見る所あり。こころより仰ぎみるに、橋柱た

つべきところならねば、両岸より巨きなる材を、鷹

の並びめぐらんやうに、しぎくにさし出して、橋の

けたをうけて、其うへに板をふせたり。そのたくみなる

こと、めをおどろかせり。そもくわが国、はしのめづ

⑤上

絵図(猿橋)

⑤下

らかなるもの、周防の岩国橋と此はしなりけり。さ

る中に、岩国のは、そのたくみたへにしてのどかな

り。こころは其さまくしびにしてすこし。いはばから絵

に似たり、かしこのは土佐がかける筆ともいふべくなん。

あないするところのもの立出て、この橋かけ替てより

三十年ばかりにもやなり侍らん。今はまたかけ替つべ

き年頃になれりといへり。いかなる人が、かばかりた

くみなるものをかけそめけん、そのもとのしらねぬは

いとあたらしくこそおもふに、もと東西の岸より
 枝をさし交はせる大樹どももありけん。今もさる梢
 どもものほどくかなたこなたよりおひしげれるがみぬ
 るに、かならずいにしへは大なる木どももの有けんこと
 知られぬ。そのをりは、もはら猿などの梢をつたひて
 わたりしところなるべし。それにならひてつくれ
 るならん。やるゆえにゆりて、猿橋とはいひけんかし。
 かの勢田より宇治にゆへ川中へ、しつとびとにふあ
 り。又大堰川の川上にも猿飛といふ所あつて
 をりくゆるものどもとびわたるあつ、とにへる

⑥上

をもおもひ合すべし。或はさる橋は算はしつとにふ
 じつ葉の詛ねるならつとにへり。つしわまじつとならさ
 知。ゆりて。
 わたぬかひの猿はつじつよの西のまじつ
 つたひておりゆけば、桂川と葛野川と出あつて
 其水、つき出たるいはほの間を、右左にまがらつて
 数町のほど流れくだらつて、猿橋の岩のはまに
 うちこそへあり。けしきごとみ。

葛野川 水のしらなみ 岩こえて かつらに落る
 音のさやけさ 川をへだてゝむかひのかたは、青き
 山ども千重にかさなりて、それより上に岩殿山
 よこおもてをあらはし、ふもととはるかに賤が家ど
 ものほのかに見えわたたりたる。似るものなし。高嶺
 のしら雲見るがうちに、けしき立かはりゆへなど
 其おもふきつくしがたし。岩殿山はこゝより二十

⑥下

絵図(岩殿山)

⑦上

丁ばかりにして、むかし武田の土小山田信茂の居
 たる名高き城あとなれば、ゆきみんことを殿夫に
 そのかせび、けさのほど雨ふりたれ、小草の
 露も深くや侍らん、つとに雲たちまよひて、又も
 降出しべき空のみまに見ゆるに、たやすくはのほ
 べくもあらざつととむるに、ひとりさかしたち
 たらんも、かた入にくきものなればとてやみぬ。うへは
 猿橋をわたらせたまひて、御くるまにめさせ給へ
 り。これより大橋駅までは路たひらかなればなり
 とぞ。大橋駅まで十四五丁の間、岩殿山を右にみて
 ゆへ。近くなるまゝ、つくづく見るに、此山、大なる巖、そ

のいただきに聳えたるほとりに、松の一も二もい
くねりがちにてたてるがいとをかし

朝あらし 岩の山を おろぎて 吹くぞかへせ

たびの衣手 大原村を過て大橋駅なり、千三百

間ばかりのくだり坂ありて、いと危し。車をおりて

⑦下

ゆへ。おりはてたる所に川あり。桂川の源にて大月

橋といふあり。こゝもいとけしきよき所なり。ことし

五月に此橋をかけたるといへり。橋をわたるとかへり

みれば、岸の上より滝おつ。いと薄きたまきの、岸の

いたゞきよひ、さうのやうにちかして、中ほどはいと

うすうす、岩角もよへ見えす。そのすそは、やうく

厚くなりて、いはほのうへに落かゝる。さながら玉を

ちらすやうなり。すべて此国はすこしばかりの

滝はいろしともなへありて、名さへ入つかぬが多く、

これこそたぐひなり。もしみやこ近くあり

ましかば、いかに名高き滝ならましを、いとあた

らう。

大月の はしのひかりと なるものは せう

つたふ たきのしら玉 ともいはまほし。や。わたら

はて、広里村なり。行々て花咲に来たり。此あた

⑧上

絵図 大月橋

⑧下

り、村々より人おほく出来て、れいの学校の弟
子とぞ。御迎の旗たてたるところおほかれど、くだ
しければ、ことぞきつるや。

いざ子ども 学びの道に おこたりて はなよき

みる 折まつわれは 花咲学校の前に織屋をま

うけて、十三歳よりはたちばかりのむすめども

二十人ばかり、甲斐絹を織居たり。おもふにかの

校の生徒なるべし。其わざを、うへのみそなはした

まふべくかまへたり。